

説教 『ゆったり、やわらかく』
聖書 ヨナ書 2：1～11／ルカによる福音書 19：1～10

預言者というと厳格で孤高、重々しい存在感がある。ところが預言者ヨナは、神に反抗的で(ヨナ 1:3)、遠慮なく苦情を述べ(4:1～3)、どう言えばいいのか、江戸町人風な軽みがある。それだけ神に対しても緊張しないのか。ヨナが相對すると、厳父たる神も、情にもろい長屋の大家さんに見えてくる。

ヨナは弁天小僧菊之助のように正体を明かし(1:9)、「オイラを簀巻きにして海に投げやがれ(1:12)」と死を決意して海へドボン(1:15)。すると神は、巨大魚にヨナを呑み込ませて救う(2:1)。随分と大袈裟なドタバタ劇だが、とぼっちりを受けた船員たちの命は危うかった(1:4)。ヨナはのっぴきならない状況になり(1:8)、「わたしの手足を捕えて海に放り込むがよい(1:12)」と死をもって事態打開を図った。

人は努力を尽くし、それでもヨナのように四面楚歌になって死を選ぶこともあるのだろうか。だが人は、死ねば神から「離れられる」わけではない。神は「死」に対しても介入し(2:1)、死に囚われた身(2:1)を解き放ち(2:11)、再び命と役割を与える(1:2,3:2)。何もヨナに限ったことではあるまい。

私たちがヨナのごとく頑なで、自分の流儀にこだわり、意地を張って神に背く。強情な私たちに神は苦笑して、「おいおい、ふくれていないで戻って来たらどうだ」と語りかける。そうなる私たちは、ヨナのようにバツが悪くなって、大仰な身ぶりで応える。「わたしは感謝の声をあげ、いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。救いは主にこそある(2:10)」と祈ったりして。私たちのこうした生硬さに比べ、神の業は「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した(2:11)」とまことにユーモラスだ。ここに来てようやく、私たちは頭をかき「てへへ」と自分を笑いながら肯定することができる。

イエスのまわりにも、そんなユーモラスな事件が起こる。「イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。〔ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい〕(ルカ 19:5)。木登りは子供の遊びで、憎々しい徴税人が木に登っている姿(19:4)は滑稽そのもの。金持ちの徴税人頭(19:2)、ということは荒っぽく収奪する、チビでも筋肉質の悪漢ぶり。「群衆に遮られた(19:3)」のも人々の憎しみを買っていたせい。こんな「敵方」と仲良くするイエスに、民は反発を隠さない(19:7)。

ここでのイエスは、教えを説くわけでも、救いを開陳するわけでもない。ユーモラスな光景の中で、「今夜はお前さんの家に泊めてくれよ(19:5)」と親しく語りかけたただけだ。柔らかく想像すると、神もイエスも、思ったほど厳めしいわけではなく、明るく、ゆったりし、楽しげでさえある。そこが暗雲を生むきっかけになった。貧しい者、病の者、虐げられた者の「味方」であるはずのイエスが、憎い「敵方」の家で、楽しく一杯やるとは許しがたい(19:7)という逆恨み。人間を「滅ぶ敵／救われる味方」にしないと気が済まない庶民の手前味噌と、世の権力が結びついて、イエスを十字架にかける。

イエスのまなざしと、のびのびとした愛に接し、ザアカイは変容する(19:8)。どのようにしても、どのようにしなくてもいいのだが、ザアカイは自ら決意をした。柔らかく、ユーモラスな空気の中で、彼自身、無理なく己を見出した。イエスが「失われたものを捜して救う(19:10)」出来事であった。



《おまけのひとつ》

私はなぜ変わるのだろうか 理解によってではない 納得によってではない まず先に変容があった それを後追いする形での自己確認 先手のキリスト 後手の私は理由づけになる事柄をあてはめた